
幻想郷で悩み相談の仕事始めました

うとかうょき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷で悩み相談の仕事始めました

【Nコード】

N3493Z

【作者名】

うとかうよき

【あらすじ】

幻想郷でお悩み相談室を開いた少年のほのぼのした毎日の物語。能力も無く、特別な力も無い普通の少年は果たして幻想郷で何を巻き起こすのか。オリ主ハーレム要素入ります。

一日目 朝

「……さて、と。それじゃ開店しますかね」

ぱんつと赤と白を基調にしているパーカーを叩き、埃を落とす。そして赤いキャップ付きの帽子を深く被り直しながら、玄関へと歩いた。スライド式のドアをがらがらと横へ開けると、秋の朝が呼び込む爽やかな風が全身に行き届いた。

「開店つと」

ドアの横にあった掛札を回し、開店を告げる。一日に一人来れば良い方の、お悩み相談室。

思えば——この世界で生まれてから早十六年が過ぎ去った。未だに外の世界で死んだというのが信じられない。

「……そういやアリスの人形劇あるんだっけか」

掛札を回し終えてから、ふとそんな事を思い出した。お金を貰う為に人形劇を度々この人里でやっている、魔法使いであるアリスの姿がぼんやりと浮かんだ。

前に一度この相談室にアリスが来て、仲良くなった。悩みの相談が、何だっけな。大したもんじゃなくて……ああ、そうだ、魔理沙の泥棒をどうすればいいかという悩みだったんだ。

『そうだな、罨張るか』

『してるわよ。アイツいつも掻い潜るんだもの』

『そういんじゃないくて、心理的な。大量の虫でも浴びせるトラップ』
『それいいわね』

とかいう恐ろしい内容の会話だった気がする。曖昧なので細部はわからないけれど、そんな感じだった。魔理沙はどうなったんだろうか……アイツなら虫くらいどうでもよさそうだけど。

まあ、今はそんな事どうでもいいか。久しぶりにアリスとでも酒呑むかな。

ドアを閉めて、台所に行き桶に入った水をごくりと飲み込んだ。秋の風に冷やされた水が、喉を宝石のように滑り落ちていった。更に二、三杯飲み込んで、息を吐いた。

そして再び客室に行き、椅子に座り込んだ。目に掛かってきた前髪を払って、そういえば新聞が来ていない事を思い出した。もうじきあの煩い烏天狗の文が、胡散臭い文字を書き連ねた新聞を置いてくるだろう。

「……暇、だなあ」

呟いた瞬間、扉がノック無しに開いた。登り始めた太陽光を背後に浴びながら、急いできたのか頬を上気させた文が居た。手には新聞。

「おはよ。また胡散臭い新聞を持ってきたか」

「おはようございます。しかし酷いですねえ、清く正しいがモットーの文々。新聞ですよ」

どの口がそういうのか見てみたいものである。聞こえないように

眩きながら、文の手から新聞を貰う。どうやら余程急いできたらしく、額には少し汗が滲んでいた。いつもより遅いと思ったが、寝坊でもしたんだろうか。

ふとそのままスルーするのが居心地悪くなってきた。

「……水でも飲むか？」

「頂きます！」

元気一杯の返事をして、シャキッと背を伸ばした。その光景が何だかシュールで面白い。笑いそうになるのを堪えて、先程まで俺が飲んでいた水を捨て、新しく入れなおす。

「間接キスだけど、どうせどっちも気にしないだろう？」

「そうですねえー、草川さんですから」

「どういう意味だコラ」

「男っぽく……無い？」

「……背が低くて悪かったな」

「童顔ですからね」

「うるせ」

その為にわざわざ帽子まで被ってるんだ。そう心の中で反論しながら、水を渡すと、すぐに飲み干しやがった。仕方ないのでもう一度汲んで、水を渡してやる。今度はゆっくりと飲み込んでから、俺

と同じように息を吐いた。

荒かった息もゆるやかになって、大分疲れも落ちたのだろう。そのまま客用の椅子に座った。

「金取るから」

「あややや、ぼったくりですね」

「それは霊夢だろうに」

そう言ってから俺も同じように椅子へ座りなおす。背もたれがあるのが客用で、無いのが俺用だから、随分と背を張らなきゃならない。昔の世界の東京じゃ考えられなかったような、むき出しの木で出来た家は、今改めて見回しても中々に寂れている。

金を稼いだら、いつかはリフォームでもするか。その時は皆を雇って手伝ってもらうか。霊夢のところによく居る鬼がまず最優先で確保しなきゃならない人材だろうな……。

「……草川さん？」

「……ん、何？」

ふと声が掛かって、意識を集中すると首をかしげた文が居た。さつきからずっと声が掛かっていたのだろうか、そんな雰囲気だ。

「朝食頂いていってもよろしいですかね？」

にこやかな笑みを浮かべながらそう言ってくる。んな表情されたら断る事なんて出来る訳ないと知っていたの顔だろうか。まったく嫌な奴だ。はあと溜息を吐きながら、頷いてやった。

「ありがとうございます！」

「いいのかよ？ 椀とかいう部下がまた煩いんじゃないの？」

前、文が相談していった椀という部下。可愛いんだけど煩い、みたいな感じらしい。というか幻想郷の住民は皆可愛いのだが、それは一体どういう事なんだろう。しかも強い。馬鹿みたいに強い。

それも女性が。男性が弱くて女性が強いという、俺が死んだ世界とは真逆の関係なのだ。紫も女だし。管理人が女ってどうなんだ、本当に。

「いいんですよ、それよりご飯お願いします！」

急かされたので立ちあがり、くると反転して台所へ歩いていく。
——途中、ピタッと足を止めた。

「取材は無しな？ ……前にとんでもねえ事書いてくれたからな、お前は」

「あやややや……まあ、ご飯だけでも頂くとします」

してやられたりという顔の文に、思い切り冷水を投げつけてやりたくなったが堪える。とりあえず今は料理を作るために材料を取り出し、まな板に載せて包丁で切っていく。定番の野菜炒めと、魔理沙に貰った茸料理でいいだろう。

適当なサイズに野菜を切り刻んでいきながら、火種を取り出そうとして……

「無い」

事に気がついた。前に火種を貰っていくのを忘れていた。買出しに行くか……面倒な。本当に面倒臭い。いや待てよ……？ 今の時間帯なら妹紅が居るはずだ。

「文、ちょっと妹紅呼んで来るから、野菜もう一人ぶんお願い」

「ああー仕方無いですね。せっかく草川さんと二人きりだったんですけど」

「頼むから誤解されそうな事言わないで」

「一夜共にした仲じゃありませんか」

にやりとした笑みを浮かべてきた。

「……あのね、それさ、違うからね？ お前の取材が長引いたから、泊めただけだからね？」

「さあどうでしょう」

本当に冷水を投げつけてやりたくなった。でも我慢。とりあえず妹紅の居る慧音先生の所まで行かなきゃならない。ドアを乱暴に開けて外へ出て、鼻を付きぬけていく寒気を切り裂きながら走って慧音先生の家まで行く――途中、見覚えのある白い髪が遠くに見えた。

「もおおこおおうううッ！」

手を振ると、向こうの人物がびくりと顔を上げた。妹紅だ。手を振りかえしてきたので、今度は手を招き猫のようにおいでおいでし

てみた。

するとこちらに近寄ってくるので、挑発するように手のひらを返してくいと指を折り曲げた。

そして――ダッシュで逃走！

背後から軽やかな音が接近してきた。

さすが妹紅！ 速いっ！

すぐに肩を掴まれた。帽子の上からぽんと手を置かれる。

「……ええと、火種になってくれない？」

「……は？」

「レッツゴー！」

呆氣にとられる妹紅の手を掴んで家に引っ張り込む。と、文がしっかりと台所で野菜を切っていた。

「おかえり」

「数分振りですね、どうも」

「あ！ 胡散臭い烏天狗！ お前草川の家で何してんだよ」

「胡散臭いとは失礼な。草川さんに頼まれたから貴女の分の野菜を切ってるんですよ。まったく」

「それじゃ料理すっかー」

「え？ 私付いてけないんだけど？」

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

「ごちそーさんでした」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

大分賑わってきたなと思いながら、窓の外の太陽を見ると既に正午になりそうだった。もうじきアリスが来るだろう。

「妹紅は見るとして……文はアリスの劇見る？ 新聞のネタになるんじゃない？」

「あー、アリスさんのですか。是非とも取材させて頂きたいと思っていますのですよ！ 拝見させていただきます」

ほのぼのした空気が流れていた。

何故だか——今日は長い気がしてならない。

そんな嫌な予感を覚えながら、アリスの劇を楽しみにしておこう。

一日目 朝（後書き）

初めまして作者です。
のんびり見ていただけると幸いです。

一日目　夕ゝ夜

——人形が回り、踊り、舞った。落ち始めた夕日に照らされた人形が最高のフィナーレを迎えた時——水が沸騰した時のように拍手が喝采された。二十人程の観客が皆表情を生き活きと輝かせ、手を叩いている。その視線の先に、人形達と共にアリスが現れた。

再び水が沸き立つような拍手喝采がアリスに送られ、にこやかな笑みを浮かべたアリスの持っている箱へ次々にお金が入っていった。

「……そんじゃ、相談室で待つとしますかね」

お金はその時に渡すことにしよう。アリスに背を向ける形でくりと反転し、自宅兼職場へと歩いていく。途中、慧音先生がこっちに向かってきた。

「こんにちは」

「ん、ああ、草川か。こんにちは」

ぺこりと頭を下げると、反応したように遠くから頭を下げてこちらに向かってきた。足を止めて慧音先生が向かってくるのを待つ。人里の守護者は、やはり気丈にその役職を保たなければならないらしく、アリスに少しばかりの警戒心を抱いていた。

とはいっても本心ではアリスに感謝しているのだろう。観客の半分は慧音先生の教え子なのだから。

「で、人形劇は終わったのか？」

「今さっき終わったみたいです。多分アリスは俺の家に来ると思

いますよ。あ、妹紅はアリスのどこ居ますよ？　ちなみに文も」

「そうか、情報ありがとう。朝、いきなり妹紅が消えたから少しビツクリしてたんだ。後で叱っておかないと」

……火種に使う為に誘拐しましたなんて言ってみろ、きっと頭蓋骨を粉碎する頭突きがお見舞いされるぞ。

「あ……妹紅なら、ちょっと俺が用合ったので……」

「そうなのか？　何も聞いてなかったが」

そいつはいきなりですからね。などとは口が裂けても言える訳ない。いつまで喰らっても慣れる事のない頭突きは、口が裂けるよりも痛いのだから。じめつとした空気の中で悪寒を感じながら、あははと笑って手を横に振った。

そして足を進め、慧音先生の脇を通り過ぎる。

「今度よろしかったら来てくださいよ。先生も色々と悩み抱えてるでしょ」

「ああ、そうだな。機会があったら是非行ってみる事にしよう」

脇目で見えた笑顔を見せる慧音先生に満足しながら、足をせつせと動かしていった。家に着いてから、閉店マークの掛け札を開店に変えた。

ドアをスライドさせて中に入り、ドアを開けっぱなしにしておく。食事をした台所に文の物と思われる万年筆が置いてあったので、多分後で戻ってくるだろう。とりあえず拾っておいた。

さて準備するか——と思った瞬間に風が吹き荒れ、反射的に目を瞑り慌てて開くと、すぐそこに文が居た。どうやら万年筆を取りにきたらしく、思い切り部屋を荒らしながら探し回っていた。

「……記者魂ってやつか。分からねえな、やっぱ」

とりあえずこれ以上部屋をぼろぼろにされると困るので肩を叩くと、物凄い勢いで振り向いてきた。思わず体がびくっとなり、眉が潜まる。反射的に手で顔をガードしそうになった。

「草川さんどうしましょうッ！ 私の中で結構大事な地位にある万年筆が！」

「そこは命の次って言おうよ。ほれ」

突っ込みながら持っていたペンを差し出すと、目に見えないスピードで奪われた。何だろう、物凄いイラつくぞ。

「……最低ね、盗むなんて」

「殺すぞ」

「あはは、冗談ですよ」

目が冗談じゃなくて獣を見るような感じだったのだから、俺はそれを冗談だとは思えない。

「とりあえず、完璧に直せよ？ 荒らされたままでアリスを迎える訳には行かんから」

「あややや……これは失礼しました」

ぺこりとお辞儀をしながら、文が再び疾風のような速さで手を動かし、落ちた飾り物や筆筒の中身などを正確に入れなおしていった。馬鹿じゃないんだような、コレでも。魔理沙なんか馬鹿だと思ってたけど、中々に頭良いし。

才能っていう超えられない壁があるんだろうな。

そんな逃げでしかない思考をしながら、とりあえず水を汲んで火種を燃やす。汲んだ水を桶の中に入れて、桶の下で燃え盛る炎を酸素を送り出して更に燃やしていく。

後方ではシュババババという擬音でも聞こえそうな程の作業を文がこなしているのだろう。

程なくすると、音が止んだ。

「草川さん、片付けました！」

「あいよ。もうじきアリスが来るだろうから帰れ」

「酷いですねえ……ま、明日またお邪魔させていただきますよ！」

「また布団の中に潜り込んできたら刺すからな」

最後の声を聞いたのか聞いてないのか定かではないが、振り向いた時には最初から居なかったかのように文が消えていた。霧のようだった。幻想郷最速というだけあるか。

とりあえず燃え盛る火に蓋をするように石を置き、火が木材に移って火事になどならないようにする。客室に歩いていき、文のお陰で更に綺麗になった椅子に座る。

と、開いたドアから二人の人物が現れた。夕日を正面から浴び赤みを帯びた一つの顔は、アリスだ。そしてもう一人――綺麗な銀色の髪を夕色に染め、メイド服を上手に着こなした何者か。

「……どうぞいらっしやいませ」

立ち上がって、頭を九十度折り曲げた。初めての客が居る場合は、基本的にこうなのだ。僅かならが洩れている殺気は――アリスのものではなくてメイドの物だろうか、果てしなく厄介である。

そして殺気を感じるという事は――俺に向けられているという事。

厄介な客だ。

果てしなく、普通の人間というものを軽く見ている気がする。確かに能力も無く力も無く頭脳も無い、平々凡々な人間というのは強者からして興味のあるものではないのだろうか。

客ならば――対等だろう。

「――草川」

アリスの声に含まれているのは、きっと横の人物に対するものなのだろう。けれど気にするものじゃない。

「どうしましたアリスさん。そちらの方は始めましてなのですが――名前をお聞きしても？」

頭を上げて首を傾げながらアリスにそう言い、横のメイドにそう尋ねた。その動作の中、帽子を被りなおした。

「――十六夜咲夜と申します。今回は紅魔館のお嬢様の遣いとして

参りました。――貴方が草川さんで間違いないですね？」

「遣い――ねえ。主の印象を良くしたいなら、その僅かに染み出して挑発するような殺気は止めた方がいいと思いますが。で、まあその通り。お悩み相談室室長兼店長の草川です。僕の事を知ってるのは何故かお尋ねしても？」

にこやかな笑みで告げると、ぴくりと咲夜さんの眉が動いた。どうやら気が付くかどうかを試していたらしい。

「……貴方の事はお嬢様が人伝に聞いたようです。私には詳しい事は分かりません。そうですね――分かる範囲ならば、十六歳にして人を見極める目を持った少年、といった所でしょいか」

「どうだか……紅魔館では貴方しか人と触れ合う機会が無いと思いますけど――ねえ。吸血鬼というのは、そういうのも分かるみたいで、恐縮です。まったく僕も頭が上がりません」

言いながら右手で頭を掻き、目で笑い掛けた。

すると初めてそこで――咲夜さんの表情が崩れて笑いになった。靄が晴れるように殺気が飛び散り、同時にアリスが動いて客用の椅子へ座った。それに倣って咲夜さんも椅子に座る。

「――それでは、お二人さんとも客ですよね？」

「ええ、勿論」

「そうです」

笑顔のアリスと――作られたような笑みの咲夜さん。確かこうい

うのを営業スマイルというのだった。

「それじゃ、まあお話聞きますよ」

「私からでいいかしら」

「私は後で構いません」

「分かりました。それではアリスさん、お話お聞きます」

言いながら立ち上がって、沸いたお湯をくみ出して木で出来たコップに入れていく。三つ分入れてから、そこにお茶の素を入れてかき混ぜた。

「草川、堅苦しいからさん付けやめて」

若干苦笑いの籠った声が聞こえた。熱くなった木のコップを持って二人の元に置いた。そして最後に、自分の手元に置く。

「いいじゃん、久しぶりだし。珍しいと思うけど？」

「まあ珍しい事は認めるけど……。アンタは素の方がいいわ」

「そうですかい。そうじゃ、まあ話せや」

テーブルに肘を付き、その腕の手の平に頬を付きながらそう尋ねた。先程までのギャップに、左の視界端で呆気にとられた咲夜さんが映った。やっぱりこの変化には驚くか、普通。

と、そこでアリスの口が開かれた。

「魔理沙なんだけど……ついに虫のトラップでさえ気にしなくなったの。信じられる？　最初は可愛く悲鳴を上げそうになってたのに……」

やはりか、さすが魔理沙。怖いものしらず。
ならばやはり酷かもしれないが、アレしかないだろう。

「……最終ステップに進む必要があるな。ここはやはり——捕獲して仕置きをしよう」

「何度もやろうとしたわよ！　でもアイツ日に日になくなっていくんだもの。今じゃ私も勝てるか分からないわ」

「そこで罠の出番だ。わざと死なない程度のトラップで魔理沙の魔力を削り、弱った所で捕獲」

「……卑怯ね」

「でもやるだろ？」

「勿論」

ぐっと拳を握ったアリスに右手を出し、ぎゅっと固い握手を交わした。

「捕まえたら呼んでくれ。アイツには俺も大事な物を盗まれたから……」

「分かったわ。磔にしてここに連れてくるわ」

「あ……いや、魔理沙は人里とちよつといざこざがあるから、俺が行く」

「……つく、ふふふ。やっぱり妙に優しいのね。その時は私が迎えに行くわよ」

くくくと腹を抱えて笑い出しそうになったアリスの頭をぺちんと叩いてから、恥ずかしくて赤くなりそうな顔を隠しながらお茶を飲む。

舌を塩酸で焼かれたような痛みの中、火傷しそうになる液体を飲み込んだ。マグマが喉を焼きながら下へと落ちていった。ふうと息を吐いて、左を向いた。

「そんじゃ咲夜さん、どんな悩みで？」

「悩みというよりもお願いですが——紅魔館に来てください」

瞬間——凄まじい魔力がアリスの体を覆い——ぐっと体が重くなった。いつの間にか存在した人形が咲夜さんの首に向けていつでも威圧の弾を発射できるように配置されている。背筋が凍りつき、湿気を帯びた空気が体中に纏わりついてきた。

かたかたと揺れるお茶の水面を見ながら、口を開けるのすら億劫な中で、声帯を振るわせた。

「——止めろアリス。殺すぞ」

殺すどころか殺されるだろうが……そう言うと、あの莫大な魔力が収まり始めた。が、俺でさえ分かる程の殺意が咲夜さんに向けら

れている。

けれどもしかし、咲夜さんの表情は憮然としたものを隠そうとしない。

それどころか——嘲笑するような笑みを浮かべていた。

ズクリと、して。

「弱いですね」

——咲夜さんの中にある隠されていた殺気が爆発すると同時に、俺は手元のコップを目の前に放り投げていた。

咲夜さんの手にあるナイフが発する鉛色の光が煌く。

木と金属の触れ合う音。

次の瞬間にはコップから洩れた熱湯が咲夜さんの手に掛かっていた。

「ッ……」

怯んだ瞬間に身を乗り出してナイフの刃の部分を掴む。切れ味良好の刃が手を切り裂くが、離す訳にはいかない。

気を緩めた瞬間の出来事で反応できなかったアリスが、慌てて魔力を一瞬で放出し弾を作成すると同時、手を離れた。

もう咲夜さんに殺す気はないだろう。

「——火傷はしてねえだろ。手拭けよ」

ふきんをテーブルの上から取って、咲夜さんに受け渡す。
素直にふきんを取って、熱湯のかかった手を拭いていた。

だらだらと血が流れている右手を握り締めて痛みを堪えながら、
ふうと溜息を吐いた。

「……よく、反応できましたね。トップスピードだったんですが」

「臆病者だからそういうのには過剰なんだ」

「それでもコップを咄嗟に投げ出す行為は、普通出来ません」

「けれど普通なんだよな、コレがさ。まあ、で——さっきの話だけ
ど身の安全は保障されてんのか？」

「ええ、勿論です」

「そっか、ならいいけど——能力あるのに使わなかったのは何でだ
？」

「……単純に時間切れですが、何故お分かりに？」

「いや、ナイフがいきなり現れたもんだからさ」

「そう、ですか。人を見極めるといふより——凄まじい洞察力をお
持ちなのですね」

「そいつはどうも。ま、そうだな——明朝行こうと思うから、案内
よろしく」

「了解しました」

「そんなじゃ、また明日。――で、アリス、お前の弱点が油断だって事が分かったよ。良かったな、死ななくて」

「……本当、ね。ちょっと危機感が足りなかったわ。ありがとう」

「どういたしまして。金さえ貰えれば文句は言わないさ」

そして

何も無かったかのように

夜は更けていく。

二日目 朝

——窓から入ってきた昇り始めたばかりの太陽の光で、薄っすらと瞼が開いた。何ともいえない気だるさが全身を襲ってくるのは、今の季節が夏だという事を考えてみると仕方が無い事だろう。暑苦しさを覚えながらも、腹筋の力を使ってむくりと起き上がった。

そこでやっと、目が冴えはじめる。靄がかって三メートル先さえ視認するのが困難だったはずの視力が、元通りになった。とりあえず寝癖があるだろう髪を触ると、右の部分が若干跳ねているようだった。

「……あー」

地割れしたような声が出た。やはり起きたばかりでは声が出辛いらしかった。

——何か危険を感じたので布団を跳ね上げる。

「……刺すって言ったんだけどなあ」

すやすやと眠る文を見ながらそんな物騒な事を呟いて、立ち上がった。とりあえず蹴り飛ばそうか思っただけで、その後が恐いのでは止めておく。

客室に歩くと、テーブルの上に新聞が置いてあった。取り出して読むと、アリスの事についてが大半の文章。どうやらインタビューはしたらしい。いつしたのか疑問だけれども、文とアリスの事だからさっさと済ませてしまいたいそうさだ。

とりあえずドアを開けて朝の空気を肺一杯に吸い込む。夏にしては涼しい朝の空気が舌の上を滑るように転がっていった。肺が満足

したように限界を告げたので、吐き出す。

それを幾度となく繰り返し返してから、ふと喉が渴いているのに気がついて家の中に戻り、台所の中にある冷水の入った桶から水を頂く。そろそろ井戸から補給しないと、ご飯を作る時に足りなくなりそうだった。

「そーいや咲夜さんはいつ来んだろ」

呟きながら、冷水で顔をばしゃばしゃと洗っていく。瞼を閉じて聞しか見えない視界に、水の音が響き渡る。染み渡らせるように顔に冷水を掛けた後、目を開けて布で水分を拭った。顔を上げて、鏡を覗き込むと寝癖を跳ねさせた己の顔があった。

とりあえず水で寝癖を押さえつけ、その後赤いキャップ帽子を被った。

「……飯作るか、な」

ボタン式のパジャマを脱ぎ、赤と白を基調にしたパーカーを羽織る。一番上にあるボタンだけを閉め、マントのようにした。ふうと息を吐いて、文がまだ寝ている事を思い出した。

ただでさえ暑いというのに、どうして潜り込む必要があるのか……きつと俺には一生掛かってでもその気持ち的理解できないような気がした。

寝室に戻ると、若干服を乱したまま寝ている文が視界に映った。邪魔だ。

「文あー」

小さめの声で呼びかけると、文の眉がピクリと反応した。何だか

イラっとしたので、額の部分にデコピンをすると、色っぽい声を上げながら顔を振る。

その後もう一度デコピンを食らわせると、うつすらと瞼を開けた。だがまだ寝惚けているようだった。

「……刺すよー、意外とガチで」

「起きてますよ射命丸文は今ここですっかり起きてますよー」

「それじゃー家から出ようか」

「……………扱い酷いですねえ、泣いちゃいますよ」

「泣け泣け喚け、もっと泣け」

「うわーん草川さん怖いよーうわーん」

「はいはい嘘泣きでも勝手にしてろ」

「……記事に、鬼畜の草川！ って書きますよ、意外とガチで」

「やってみろ。契約破棄と来訪禁止は確定になるから」

「やっぱり一筋縄じゃいきませんね。というか、私結構心配して来たんですよ？ 何でも吸血鬼姉妹が居る紅魔館に行くそうじゃありませんか。――生きて帰れるか、分かりませんよ」

ぞわりと、茶番を繰り返して緩みきっていた空気が、蠢き――引き締まった。引き絞った弓のように緊張感が――増幅した。文の最後の言葉が脳の中で再生され続ける。

生きて帰れるか——分からない。

立ち上がり、文に背を向けた。後ろで衣擦れの音が響いた所からして、立ち上がったのだろう。

部屋を出ようとして——足を止めた。後ろの音も同時に止まる。

「やっぱし、分からないから——恐いんだよな」

恐怖。

未知という名の——恐怖。

そうだ——死ぬかもしれないのだ。俺は、わざわざ危険な館へ行って何をする？ 依頼ではなく、お願いだ。命の保障はするといったが、所詮それは口約束でしかない。そもそも保障という単語自体が、絶対ではないのだ。

死んだとしても——それは俺の責任でしかない。

そして——死んだら俺は何もかもを失う。全てを、失う。喪失。

未知。

死っているのは——そういうもんだ。

「草川さん。今からでも——逃げましょう。わざわざ命の危険に身を晒す必要はありません。何かが有ってからでは——遅いんです」

後ろからの声は、先程までの冗談をやりあっていた文とは別人のようだった。気配も違う。

「——でもさ、文」

けれど、俺は自然と声が出た。後ろに体ごと振り返った。不安そうな顔をした文が居た。その表情の中には——俺の言葉を予想して

いるのであろう、諦めの色が入っていた。

そう、その通り。

その予想で正しい。俺の言う言葉は——最初から決まっているんだから。

「——悩みを抱えていない奴の依頼を、俺が受けると思うか？」

答えは、無かった。

「悩みがある事を見抜いたから——俺はお願いを聞いたんだ」

——能力も無く力もなく頭脳も無い、平々凡々といっても差し支えないだろう俺を館に招き入れるというのは——それだけの理由があるという事なんだ。

そして俺の職業はお悩み相談室室長兼店長だ。

「そもそも、さ」

そこで笑いかけた。

「この世界に生まれた時点で——死ぬ覚悟は出来てんだよ」

慧音先生に言ったら脳漿をぶちまけて死んじまいそうな程の頭突きを喰らうだろう。

妹紅に言ったら内臓を全て炭に変えられちまいそうな程の火炎放射を喰らうだろう。

それでも、それは本心だった。

生まれた時点で、死ぬ事は確定している。

「死ぬまでの間に満足出来るかどうか、人生の勝者と敗者を分けるんだ」

俺は死ぬ時に最期の言葉なんて、そんな臭い台詞を残すつもりはない。

台詞を残す必要さえ無い程に――きっと満足して死ぬるだろうから。

満足して死ぬるような人生を歩めるだろうから。
これはその一歩でしかない。

死ぬかも知れない？

それが、どうした。

「そんじゃ、どうするよ。飯食ってくか？」

「……頂いて、いきます！」

いつもの表情だった。

涙を零さぬように、その瞳は揺れていた。
涙を零さぬように、その口は結ばれていた。

「つかさ、死ぬと思うか？ 俺が」

「はい」

「……ひつでえな」

「何だかもう今にも死にそうですよ」

「何？ さっきの報復かよ」

「さあどうでしょう？」

「そこは嘘でも死なないって言えよな」

「嘘ですけど死なないと思いますよ」

「やっぱお前もう家入れない」

「そうすると草川さんの評判がガタ落ちしますよ」

「……なんかさ、今思ったんだけど。お前ってその口調で毒舌だよな」

「そうですかねえ。草川さんにはこれで慣れちゃったんですよ」

「昨日だかに『盗むなんて、最低ね』とか言ってた奴が居るんだけど、さてそいつは誰でしょう」

「さあ誰でしょうね」

「おめえだよ」

「あややや」

二日目 昼（前書き）

どうもこんにちは作者です。

嬉しい事にユニアクがどんどん増えています。

お気に入りも増えてきました。

飛び跳ねて喜んでます。

とりあえずフラグ建設してからほのぼのしたいと思います。
楽しんで頂ければ幸いです。

二日目 昼

「……いや、しかし咲夜さんや。この異変はやりすぎだろ」

木々が伸び草花が生い茂った道を行き、やっとの事で太陽の光を拝めると思いきや——既に太陽の光が当たる場所なんて無かった。空中に染み渡っている紅い霧が、太陽光を遮っている理由の大部分だろう。

「霊夢や魔理沙にこっぴどくやられると思うぜ？」

半分脅すように声質を変えながら、右隣の咲夜さんをちらりと見た。けれど咲夜さんの表情変わっていなかった。それどころか自信に満ち溢れた表情さえしていた。

こいつは——主を狂信しすぎて盲目的になった、一種のおぞましいファンのようだ。

「——そうなる事は、まずありません。私は勿論の事、すぐ門の所に居るチャイナ服の女が全力で阻止します。万が一お嬢様の所へ通ったとしても——お嬢様は『運命を操る程度の能力』をお持ちです。負ける事はありません。あぁ、それと、さんなんて付けなくて構いません。咲夜でどうぞ。私も普段通りの口調に戻りたいので」

一切合切言葉を遮る事なくそう早口で告げて、挑発的にこちらを見てきた。俺の身長が小さい為に、やや見下すような形になっている。年齢でさえも、俺はこの人の足元にも及ばないし、それは強さでも賢さでも言える事だろうな。

草花が生い茂る道を歩いた為に汚れてしまった靴の爪先で、とん

とんと地面を蹴る。ふうと息を吐いた。

「ま——じゃあ、そのお嬢様とやらに合って、依頼の内容でも確認しましょうかねえ」

「あら、そんな口調で良いのかしら。命が惜しくないの？」

「おいおい。さっそく命の保障が有るっていうのが嘘って発覚しちゃったぜ？ まったくどうするよ」

「心配しないでいいわ。お嬢様はきっと、選択肢を与えるだろうから」

「生きるか死ぬかの選択肢とか、笑えねえ」

苦笑いでそう告げて、一歩足を踏み出した。目の前に、山のように根を下ろした馬鹿みたいにでかい紅魔館がある。

惑いを消すように、もう一歩足を踏み出す。そして後ろから咲夜が近づいてきているのを音で感じながら、目の前の門番に近づいた。

「あ……咲夜さん。異常はありませんよ」

「そう、そのまま警備を続けて。この男はお嬢様の客だから、気にしないでいいわよ」

「了解です」

事務的なやり取りを惰性で聞き流しながら、咲夜さんが前に出るのを待つ。

そして——スケールの大きすぎる扉が、軋んだ音を上げながら開

いた。

「うっわ。さすが吸血鬼の館か。赤いな、おい」

「そう？ 私はもう慣れたわ。あ、迷子にはならないで頂戴ね」

「誰になるかよ」

扉が閉められるのを気にしないまま、咲夜はさっさと足を進めていく。付いていく形で歩きながら、周りを見回していく。

薄暗く、赤い。それは錆びた鉄のような色を催しだしていて……血のようだった。

赤は好きなので、共感は出来そうだ。

キュツと、帽子を深く被った。

その後幾つかの角を曲がっている間に、帰り方なども忘れてしまった。目印になるような所も特になかったから、きつと一人で館を出ることは不可能だろう。妖精メイドが見えるという事は、俺が一人で館から出ようとした場合は襲ってくるという事だろう。

——何が選択肢だ。

馬鹿にしゃがって。

内心で憤慨しながらも足を進めていくと、不意に前を歩いていた咲夜が足を止めた。同じく止めると——咲夜が後ろを振り返った。その顔には好奇心のようなものと、そして探りのようなものが合わさっている。

「——この先にお嬢様が居るわ。私はこれ以上貴方に干渉はしない。貴方が死ぬ時も私は関与しない。私はお嬢様の命令が下るまでは――」

「必要以上に貴方へ何もしないわ。扉を開けたら、それは始まる。——どうする？　今なら、生きれるかもしれないわよ？」

「馬鹿も休み休み言ってる。そんな忠告をしてくれた優しい優しいお前に免じて——依頼を受けてやるよ」

そう言って——目の前の一際大きな扉を、開け放った。

中に居たのは、幼い体と幼い顔から凄まじい妖気を滲ませている吸血鬼だった。

紅魔館の主でありお嬢様。

その目には、見定めするような視線が含まれている。

「——初めまして。お悩み相談室室長兼店長の、草川です」

内心冷や冷やしながらも、頭を垂れてそう告げた。尚も全身で感じるのは、全ての者を圧倒し平伏させる程の妖力と、好奇の混じった視線。

背後で、扉が閉められた音がした。体が過剰に反応して強張るのを、何とか耐える。

——ちと、俺にこの空気は辛すぎるかもしれない。

「……つまらないわね。咲夜から聞いたからどんな男かと思いきや——唯の人間じゃないの」

妖力が一層空気を支配した。大気が震え、脳味噌が揺れる。視界がぶれて、焦点が合わなくなった。混乱状態に陥りそうになるのを、必死で耐えた。

尚も空気は張り詰めている。まるで心臓を握られているようで、気が気じゃなかった。今にも頭蓋骨を割られ脳漿をぶち撒けられて、

顔中の細胞を一つ残らず粉碎されてしまい、舌を噛み切って糞尿をバケツを倒した時のように噴出してしまいそうで――そこで、我に返った。

「……ええ、それで貴方様のお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

ふっと、短く息を吐いてから早口でそう捲し立てる。

今は仕事中だ。

どんな客であろうと、頼られた事には変わらないのである。

「レミリア・スカーレットよ。貴方が一生口に出来ない名前でも――あるわね」

頭を上げると、意地悪い笑みを浮かべたレミリアさんが映った。

それはつまり、名前を呼んだ瞬間に殺すぞという脅しだろうか？

それとも、今すぐ殺してしまうぞという脅しだろうか。

どちらにせよ、どうでもいい。

すっと、パーカーのポケットに手と突っ込んで、中に水の入ったボールが三つある事を確認した。

「それじゃ――」

ごくりと唾を飲み込み。

一瞬でもタイミングを外せば死ぬ覚悟を決めた。
外す、ものか。

「レミリアさん」

――水の入ったボールを放り投げると同時に腰を落とした。視界

がぐるりと渦巻く程の圧倒的なを感じ――瞬間、ボールが破裂した。地面に這い蹲るようにしながら、爪先に力を込める。レミリアさんが困惑の表情をしながら目の前に居たが、すぐに何が起きたのか理解したようで、次の瞬間には俺に顔を向けていた。

けれどその行動すら遅く、すでに俺は水の入ったボールを頭上に投げ、爪先に込めた力を爆発させてレミリアさんの射程から消えていた。寸分狂わず繰り出された拳は、けれどボールを突き破って、衝撃により流水と化した水に突っ込まただけだった。ごろりと転がりながら、三つ目のボールを掴もうとして――

「――ツウウ！」

凄まじい衝撃を背中に感じ、気がついた時には唾液とも胃液とも分らないような液体を口から吐き出しながら、壁からずり落ちていた。痛みよりも衝撃によって視界が真っ白に染まって、ちかちかと明暗を繰り返していた。徐々に痛みが背骨付近を這い上がってきた。

その痛みが胸まで来ると、突如咳が込み出た。涙で明暗を繰り返している視界が揺れはじめる。力が出なかった。視界の中で、レミリアさんと思わしき人物がこちらに近寄ってきたのが分かった。その後ろには――咲夜。

ああ、畜生。

咲夜の存在を忘れていた。

主の危機で、咄嗟に俺を吹き飛ばしたのだろう。

「一生口に出来ないはずの名前だと――告げたはずよ？」

レミリアさんの声が脳内で繰り返された。聴覚がやられてしまっ

たらしい。後頭部を強打してしまったせいか、気がつくまで左の視界が消えていた。

尚も近づいてくるレミリアさん。その足が、俺のすぐ近くで停止した。

「言い残したい言葉はあるかしら」

「……」

「どうやら——言葉も出ないようね」

「……」

「死になさい」

——ボールを、ほぼ反射的にレミリアさんの視界の中に上げていた。繰り出される拳が、そのボールを見てコンマ一秒停止した。射程からボールが外れると、その拳は俺の顔面を粉碎する——はずだった。

そのコンマ一秒で、俺の顔は傾けられていた。本来ならば気がつく間もなく死ぬはずのスピードだったからこそ、その一秒はあだとなる。

苦々しく呼吸を繰り返しながら、壁に減り込んだ小さな手を引き抜く。ごふっと、血が咽た。息をするのが、辛い。もしかしたらこのまま死ぬかもしれない。

けれど、立ち上がった。失神しそうな衝撃を受けてぶるぶると震える足を、必死に支えて。

けれど、立ち上がった。

立ち上がるだけの理由が、あるから。

悩みを持つ依頼人が、いるから。

だから、立ち上がった。

「さて、と。依頼内容を、お聞きしますよ」

抜けたような声だった。息をすると喉が金切り音を上げる。俺でさえ見下せる身長のリミアさんの表情が、まるで珍しい生物を見るかのようなものに変わっていた。その後ろの咲夜の表情は、驚愕だった。

まだ依頼は聞いていないのだ。それを聞くまで——倒れる訳にはいかない。

「そう——ね、分かったわ。貴方が普通の人間じゃないってのが、良く——ね」

「普通だから、死にそうなんですよ。依頼とか、悩みを、どうぞ」

「……今の悩みは——そうね。今、どうしても手に入れたくて仕方がない男が居るわ。男の癖に小柄で、女のように可愛い顔なのにも関わらず、魅力があるのよ。どうやったら物に出来ると思うか、意見を聞かせてくれないかしら」

「色仕掛けでもしたらどうですか？ 男ならコロって落ちますよ」

「そう。じゃあ、そうするわ」

「何て冗談でして、ね。とりあえず、今はさっさと依頼を話してくれないと……本当に死ぬかも知れないんで」

「死なせないわよ。……そうね、依頼だったわね、本来は」

シんと、空気が冷えた。

「妹を、助けて」

「その依頼、受けましたよ。それで、その男はきつと——五百年位、情熱的にアタックしないと落ちないでしょうね」

二日目 昼（後書き）

感想など頂けると嬉しいです。

二日目　夕？（前書き）

感想にて、ありがたい質問がありましたので、前書きに質問と答を。

Q、何故主人公はレミリアに喧嘩を吹っつけたのか。

A、先の話で伏線として置かせて頂いた『客ならば対等』という心理描写が関係しています。完全に見下されているという事が、我慢ならない。どちらにせよ死ぬかもしれない状況でもありましたので、主人公は悔いのない選択を選んだのです。

質問ありがとうございます！

二日目　夕？

無言で前を歩く咲夜に声を掛ける事が出来ないまま、紅魔館の廊下を歩いていると、唐突に咲夜の足が止まった。同じく止まると、しかしそのまま何の変化も無かった。咲夜はこちらに何も示さないまま、その場に留まっている。だから俺も余計な事は何もしなかった。

その後立ち止まって数十秒、くると咲夜がこちらに振り返った。

「……応急処置は済ませたわ。まずじっとしていれば、死ぬ事は無いでしょうけど——妹様を相手にすれば、確実に死ぬわよ」

「あー、応急処置ありがとな。それと、依頼を受けたからにはキャンセルなんて出来ねえよ。レミリアから詳しい事は聞いたけど、ようは馬鹿でかい狂気を抑えればいいんだろ？　言葉の通じない相手なら無理だったかもしれないけど……」

そこまで言って、ふと咲夜の肩越しに人影が見えた。言葉を止めて、じっとそちらを覗き込むと、見覚えのある二人の人物が居た。そこで気がついたように咲夜が後ろを向くと——霊夢と魔理沙がこちらに向かって来ていた。

「よっす」

咲夜の影から抜け出して片手を上げると、俺に気がついたらしく足を止めて目を変えた。どうやらどうしてここに俺が居るのか理解出来ていないらしい。だがその理由にすぐ気がついたようで、二人も片手を上げた。

「異変解決の手柄は頂いたッ！」

「な、何だって！ 私達が来た意味が消えるんだぜ！」

「ふふ、黙って弱者は強者のサポートに回るがいい！」

「く……仕方が無いんだぜ……」

「馬鹿やってないで詳しく説明しなさい」

魔理沙と共に霊夢から拳骨を喰らったので、わざとらしく頭をさすりながら咲夜に視線を向ける。と、呆れた表情でこちらを見ている咲夜が居た。

「レミリアの依頼を受けて紅魔館に到着すると、どうやら異変は使える人を集める為に起こしたという事で、つまそれはどういう事なのか聞いてみると、狂気に侵された妹を助けれる人員が欲しいとの事。依頼なので俺はそれを了承し、この最強メイドさんとお前らが来るのを門の前で待っていてしようとしたんだけど、歩いている途中でお前らが来た」

割と懇切丁寧に説明を終えた時には、既に目をじとつと垂らした二人が居た。どうやら利用されている事が気に喰わないらしかった。しかしこう思う事は仕方無い事だと沈黙していると、おもむろに咲夜が二人に一歩近づく。

そして――頭を下げた。

プライドが高く――仕えた人以外には決して頭を下げないと思っていた咲夜が、霊夢と魔理沙の二人に頭を――下げた。

「――お願い、します」

振り絞るような、声。空気が凍った。誰も動かない。

後は二人がどんな答えをするかだが、そこに俺が介入する余地はないだろう。この二人が了承するに越した事は無いが、異変を起こしておいて人をお願いするというのは幾ら何でも常識に欠ける。

だから断ったとしても、咲夜もレミリアも何も言えない。言えるはずがない。

程なくその空気が続いて、不意に魔理沙が溜息を吐いた。続いて霊夢も、同じく溜息を吐いた。

空気が再び動き出した。

「草川は受けるんだろ？　なら私も受けるぜ」

「どんな決断だよ。もっとマシな決断しろや」

笑顔でそんな事を言った魔理沙にそう突っ込むと、霊夢も口を開いた。

「面倒だけど仕方無いわね。あ、依頼料の半分は貰うわよ」

「お前は碎け散れ。紫から援助受けてる身でほごくな」

「そうだぜ霊夢。遠慮するんだぜ」

「アレは募金だから良いのよ」

「おいこら魔理沙。何しれっと言ってんだ。お前が遠慮を知れや。つか霊夢、募金で何だ募金で。募金だろうと餓死する事は無いんだ

から金要らないだろお前」

漫才のようにそんな事をしていると、横から溜息が聞こえた。ちらりと見ると、気の抜けた表情の咲夜が視線を俯かせている。何を思っているのか知らないけれど、多分その感情の中には安堵が含まれているんだろう。

予想しながら、二人で喋っている霊夢と魔理沙の顔を見据える。すぐに二人と視線を合わせた。同時に、緩んだ空気が静まりかえった。四人分の呼吸だけが聞こえる。心臓の鼓動さえ聞こえそう。

そして、咲夜が、一步、踏み出す。

続くように、俺達も、一步、踏み出した。

「それじゃ——狂気のヒロインを救いに行くとしましょうか」

心の中で、先程咲夜に言い忘れた言葉を思い浮かべた。

どうやら俺は、死なないうつだ。

しばらくの間、適当に会話も交えながら迷宮のような道をくねくねと歩いていると——空気が、変わった。それは故意的なものではなく、自然なもの。自然と、空気が変わったのだ。

足を止める。唾を飲み込んだ。目を閉じる。短く息を吐いた。目を開ける。三人がこちらを振り返っていた。

三者共に心配そうな瞳だった。心臓が跳ねた。空気が悪い。胸がもやもやとしたものに満たされた。この空気はマズい。この空気は苦手だ。狂気。圧倒的な狂気の空気。意識すればする程、胸が苦しくなった。初恋のようだ。止める。馬鹿が。

足を進ませようとしても、進まなかった。体が拒絶している。進

めない。足が踏み出せない。恐いのか。怖いのだ。現実を目にして、怖くなった。恐れた。息をするのが辛い。喉が酷く渴いた。ここまですら狂気が圧倒的だったのか。

ちよつと、落ち着こう。

深呼吸をしよう。脳を怒りで染め上げれば、こんな気持ちにはならないのだろう。脳を何かで染め上げればいい。けれどだからこそ、狂気に染め上げられてしまうのではないかという恐怖がある。進めない。これ以上、進む事が出来ない。

先を見据えた。三人は止まっている。俺を待っている。行かないやならない。

——電撃が走った。

脳天から爪先を駆け抜ける電撃。

それは、予感のような——直感。

ここで退けば、二度と進めない。

そんな直感。

迸る電撃。

足は動いていた。

極々自然に、狂気の満ちる空間へと進んでいた。

足が、狂気に落ちた。

「……ごめん、待った？」

「待ったぜ」

「待ったわよ」

「待ったわ」

「ひっでえな。むしろ進めた事を褒めるべきだろ」

「普通でしょ」

「普通だぜ」

「普通ね」

足は特にどうという事もなかった。

重いわけでも。

痛いわけでも。

激しいわけでも。

苦しいわけでも。

何でもなくて。

どうという事も無かった。

紅い絨毯に足を踏み出したという、ただそれだけの結果だった。
この一歩が、どれだけ重かったか。

「……よっし慣れた慣れた。行くかー」

「嘔吐きだぜ」

がしっと、左腕を掴まれた。

「ほんと、嘘が下手よね」

がしっと、右腕を掴まれた。

体が安心感に包まれて、軽くなった。

「見せ付けるわね……。さ、行くわよ」

ばふっと、帽子を押された。

「……お前ら子ども扱いすんなや。霊夢と魔理沙とか、俺より一歳年上なだけだろうが」

「私も十七歳よ」

「さいですか。つかそれなら尚更だろ」

「背、小さいし」

「いやちよつと待て。魔理沙より俺大きいと思う」

「同じ位よ」

「え、マジ？」

「そうだぜ。変わらないいつ」

「暑い！ くつつくな！ 緊張感持て！」

二日目　夕？（前書き）

読者が減るかもしれませんが、地の分がかなり含まれ、改行をかなり減らします。

二日目　夕？

重々しく鎖がクロス形に貼り付けられた鉄の扉を前にして、自然と足が止まった。前に居る咲夜の髪が振り子のように揺れて、そして止まった。左右の温かみが零に帰る。俯き、赤一色の絨毯を眺めながら、その時を待つ。時間は止まっていた。緊張によりもれてきた汗が、頬を伝う。顔を上げると、咲夜が鎖を外す為に鍵を取り出していた。

照明に照らされて己の存在を見せびらかすように、その大きな鍵はギリギリと星のように煌いた。それだけで人の首を掻ききれそうな程だ。左右の手を二人から振りほどいて、パーカーのポケットに手を突っ込む。ボールは無かった。レミリアで全て消費したのだ。もう、己の体を守る物は何一つとしてない。汗がもう一度頬を伝った。緊張で胸が苦しくなる。息をゆっくりと吸い上げた。

一個目の鎖が、解けた。金属音をけたたましく鳴らしながら鎖は地面へ落ちた。息をゆっくりと吐いていった。鎖に映る俺は酷く歪んでいた。それは屈折の為なのか、果たして真実なのか。歪な形の顔を眺めながら、自然に下へ向いていた視線を上へ持ち上げた。

二個目の鎖が、解けた。もう後戻りは出来ない。鉄製の扉が、その全貌を現した。久しぶりの開放を嬉しがっているように、扉は銀色に煌いていた。咲夜の髪が振り子のように再び揺れ、こちらへ振り向いた。

「――それでは」

声を聞きながら、埃一つない絨毯に向けて左足を踏み出した。汚れた靴と、ジャージの裾が衣擦れの音を発しながら、揺れた。酷く歪だった。扉までの距離はもうメートルも無い。鉄製の扉は俺達を歓迎するかのように、煌いていた。水分を求めるように喉が鳴る。額の汗を拭った。帽子が上がる。

横から足音が聞こえ、巫女衣装の裾と箒の先が見えた。それだけ

で幾分か呼吸が楽になる。力の抜けそうな右足を、力強く踏み込んだ。か細い息が喉から洩れる。両足を揃えて、右手をドアノブへ持っていく。開いた瞬間に死んでしまうかもしれない、何もかもが無に帰ってしまうかもしれない、そんな負の感情が渦を巻きながら俺を引きずりこんで行きそうだった。

酷く冷たいドアノブを、ゆっくりと回した。錆びた鉄の音が、かちやりという小気味良い音と混じって聞こえた。――そしてドアを一思いに開いた。何も考えず足を踏み出し、中に入る。遅れて二人が入ってきたのだろう音が聞こえた。

「――お兄さん、誰？」

瞬間、体が硬直した。扉が閉まる音が背後で轟く。床が揺れた気がした。目の前に居る幼い少女は、その狂氣的な瞳でこちらを見据えていた。何とか視線を外して、状況を確認する。頭を強打すれば間違いなく死に陥るであろう、重々しい雰囲気醸し出す床と壁。所々に置いてある家具などは、しかしそれでも頑丈なものには変わらないはずだ。

推論と仮説を組み立てながら状況を確認し終えて、ふと後ろが寒い事に気がついた。それは寒いというよりも悪寒に似ており――すり足で後ろに下がると、壁にぶつかった。どこにも、霊夢と魔理沙が居ない。何が起こったのか理解出来ないで居ると、不意に少女が立ち上がる。不思議な帽子の下にあるショートカットの金髪が妖精のように煌き、宝石を嵌めこめたような異形の羽が持ち上がった。まずい予感が脳裏を弾丸のように掠めていき、次の瞬間には目の前に少女が立っていた。いつの間にも移動したのか追いつけない。直線でありながら、見えなかった。

ごくつと、生唾を飲み込んだ。全てを呑みこむ威圧感と共に伝わってくるのは、これまた全てを圧倒するような狂気の渦だった。先程消えた負の渦潮がまた巻かれ始めた。頭を小さく振って、ブラッ

クホールにその感情を沈めていく。ここで俺が飲み込まれたら元も子もないじゃないか。

「ねえ——聞いているの？」

そんな声が聞こえて、少女の瞳を覗き込んだ。歳相応の、わくわくとした瞳だった。けれどそれは何かが近く、決して子供にはない黒さがあつた。レミリアが五百ならば、この少女は四百九十五歳なのか。それほど、一人で暮らしてきたのか。

「……挨拶遅れました。草川と申します」

すつと頭を下げた。そしてその場に左膝を付き、少女と目の高さを同じにしてから、爪先に力を込めた。用意周到に越した事はなく、何か有った場合にはすぐ駆けるようにしなくてはならない。赤い瞳が興味深そうに細まって、そこで初めてレミリアと似ていると思った。

やはり姉妹なのか。

「——ねえ、遊んでくれるの？」

声が聞こえた。

「いえ、遊びに来た訳じゃないので」

事務的にそう答えながら、背中がびつしりと冷や汗で濡れているのに意識を集中させる。一瞬でも選択を見誤れば、死ぬ。頭の片隅に霊夢と魔理沙の事を押し込んで、あくまでも相手のペースに乗る。

流されるまま、話せば良い。言葉は通じる。

「それなら、どうして来たの？」

単純な疑問であり純粋な疑問でもあつたその言葉に、息が詰まった。

「レミリアに、貴方の悩みを解決してくれと依頼を受けたんです」
声が途中で途切れそうになるのを堪えて言うと、少女の瞳が開かれた。赤い瞳が妖しく光る。

「何を、今更。お姉さまは——私をッ！」

最後の叫びを聞かない内に、重力を何十倍にもされたような重さ

を感じて、頭が自然と下がった。床に脳味噌をぶちまけてしまいそうなか、それでも土下座のようにするわけには行かないので、耐える。首が痛み、背中がぎしぎしと鳴る。威圧感のみでここまで人を圧倒できるものなのか。疑問は重力に従って脳味噌から垂れていく。尚も威圧感が増す。

「……帰って。悩みなんて、無いわ」

そんな中呟かれた言葉に、しかし従う訳にはいかないのだ。歯を思い切り食いしぼると、赤錆の臭いが口の中に充満した。威圧に逆らうように、目を見開いた。頭を上げて、少女の暗く赤い瞳に目を合わせた。

視線が交わる。

「無いのなら、俺はここに来ていませんよ」

うめき声のような声がもれ出た。視界がぶれて、白い残像を残し始める。小さな火花のような光が視界中に浮き上がった。そして舞い始める。視線はしかし外されなかった。少女の眉がひそまり、同時に瞳も強く赤い光を帯び始めた。

「無いって言ったら、無いのよ」

凄みを帯びた声で、思わず気が抜けそうになった。けれど抜かなかった。抜いてしまえば何もかもが終わってしまう気がするから。ぎゅっと拳を握り締める。歯茎の神経が切れ始め、ついには痛みさえ感じなくなった。代わりに握り締めた拳から痛みが伝わる。強すぎて手のひらが爪に裂かれたのか。手汗に混じって熱い液体が拳の中に溜まっていくのが分かった。

「あんたに悩みが無いなら、俺はここに存在していないって、何度言えば分かるんですかっ」

搾り出した声が洩れ、もう体が限界なのを告げていた。途切れ途切れにしか言葉を紡げなく、最終的には吐き出したような声になってしまう。まさしく限界だ。

けれども、ここで折れたら元も子もないのだ。依頼は完遂しなければならぬし、何よりもレミリアと約束した。約束を破ってまで

生きる程、俺は出来た人間じゃない。天国と地獄なら迷い無く天国を選ぶようなロクデナシだからこそ、俺はここで折れる訳にはいかない。

そこで、背中に衝撃が伝わった。壁から伝わった電波なようなものが、俺の体に何かを告げた。瞬間、理解する。

役者が揃った。

「……話してください。俺達は、貴方の話を聞く為に来た」

声はすんなりと喉の奥から出た。左から、紅と白の衣装が揺れ、右から、黒と白の衣装が揺れたのが見えた。何をしていたのか聞く事はしなかった。そんな野暮な真似はしない。何かをしてきたのだろうから。

予測という誰にもバレない裏切りをするのなら、レミリアに呼ばれでもしたのだろう。

「——何も分からない癖に、どうしてそうやって……そうやってッ！」

魂の震えるような声だった。

「分からないから、聞かせて欲しいんです」そう問いかけると、少女の拳が握り締められた。左右から霊力と魔力が跳ね上がる。それを両手で制す。

「聞けるの？ 私の——話が、思いが、悩みがッ！」

「聞けます」

即答した。

ただ事務的に、即答した。聞かなくてはいけない事だからこそ、即答した。狂気に侵された少女だからこそ、即答した。何もかもを理解出来るか分からないからこそ、即答した。心の拠りどころが無い少女だからこそ、即答した。

即答した。

「私、は——ッ」

名をフランドール・スカーレットという吸血少女の話を聞き終えた頃には、既に地下室に訪れてから数時間経っていた。話の内容は、思考するに及ばない。

ただ、何もかもが複雑に絡みあった物語としか、言えない。

蜘蛛の巣のように張り巡らされた物語の中に、紛れ込んだのが――もつれ。全てを台無しに変えてしまうような、もつれだった。

「……ねえ、どう、思う？」

話し終えて、何もかもを吐き捨てた少女はそう尋ねた。右に居る魔理沙が帽子を深く被りなおしたのを、視界の端で見た。アレは何かを隠す仕草で、隠したものは、感情だろう。左の霊夢は動かない。不動だった。何かを堪えているようにも見える。静かに目を瞑った。

「……どう、思った？」

フランドールの声が、震えていた。

「ねえ、聞いてる？」

答えなかった。

「ねえっ！」

「今からの俺の言葉を、受け止める覚悟がありますか？」

目を開ける。呆気にとられたようにフランドールはぼかんとしていた。そして急激にその表情が変わり、目を細めたものにならなくなった。

無言が続く、それが了承なのだとは認識してから、俺はゆっくりと口を開いた。

今から話される言葉は、きっとフランドールの全てを否定するものになるだろうし、尚且つ全てを崩壊させるものになるかもしれないが、しかしこれと話さなければ物語は終わらなく、始まらない。意を決して、話さなくてはならない。

声帯が地震のようにゆっくりと大きく揺れ、喉の奥から鋭い矢の

ような音が飛び出し、その音は大気の中を波紋のように伝っていき、ついにはフランドールの耳の中へ進入して、果てなくするとフランドールの脳味噌へ到達し、そして何もかもを伝えるだろう——だからこそ俺は、それを想像しながら喉を奮わせた。

「貴方とレミリアは、どっちも間違っている。話を聞いていて思った事だが、正しい事なんて——正しい行動なんて、何一つとしてない。それが、この結果を、この現実を生み出した。貴方はレミリアが自分を閉じ込めた事に腹を立て、怒っている。だがレミリアは貴方が狂気に侵され、我を見失う事を悲しく思っている。レミリアの行動は貴方を思っている行動であり、貴方はそれを傲慢だと言い張っている。噛みあっていないんです——どこかで何かが絡まったまま、貴方達は今日この日まで進んできたんです。そして変わらなければ、貴方達はずっとこのままだ。このまま生きて、このまま死んでいく。未練という後悔の念を残したまま、心臓を止めていく。」

——まずは自分の間違いを認めましょう」

「——なによっ、何よソレツ！」

理解出来ないのか、はたまた理解したくないのか、フランドールは頭を振ってそう叫んだ。

「レミリアを許す事が第一歩です。そして俺はそれしか言いません。後は貴方の行動だ。そして貴方がレミリアさんを心の底から許す事が出来るのなら——俺も次の助言をします」

さながらマネージャーのようだど、ふと思った。付いていた左膝を持ち上げて、立ち上がった。後方の左右から視線が貫いた。

「この手を——取りますか？」

そう言っ、右手を差し出した。

「それとも——壊しますか？」

その手をぎゅっと握り締める。

「どうするかは——貴方が決めてください」
ぱっと、手を開いた。

フランドールの瞳が赤く染まる。そして明暗を繰り返し始めた。
程なくして——フランドールの手が、俺の手と合わさった。握手が
交わされる。

それが合図だった。

天井が、ぱかりと開いた。

その位置は丁度部屋の真ん中だった。そして開いた天井から、二
人の人物が降りてきた。一人目が、咲夜で——そして、二人目がレ
ミリア。後は俺達の出る幕じゃない。

何かをしてきた霊夢と魔理沙の方を向いた。誇らしげに笑みを浮
かべている霊夢と、帽子の中から恥ずかしげに笑みを浮かべている
魔理沙が居た。「お疲れ」と声を掛けて、すぐ隣にある扉を開けた。
背後から聞こえてくる言葉の羅列を理解しないように努力しながら、俺達は部屋を出た。待ち構えていたのは赤い紅い道。あの三人
が出てくるまで、俺達はここで待たなきゃならないらしい。

「……誰か道覚えてねえのか」

「……」

視線が合わなかった。

それでもきつと、心は通っていたのだろう。

二日目　夕？（後書き）

久しぶりに思い切り書いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3493z/>

幻想郷で悩み相談の仕事始めました

2011年12月16日19時49分発行